

2022年12月25日

# 「変革思想とアジア実学」読書会

『中江兆民の世界』『三酔人経綸問答』を読む』を手がかりに

関西学院大学法学研究科  
田中 豊

# 中江兆民について

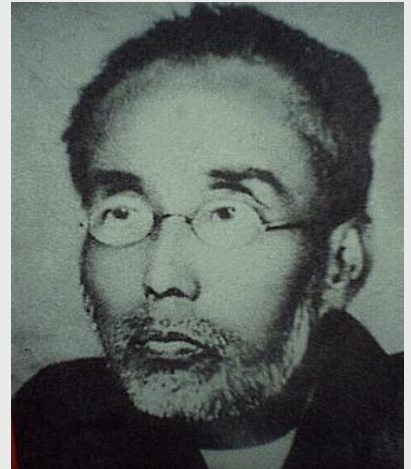
1847年土佐藩の生まれ。幼名・竹馬、その後、篤介と名乗る

明治維新の後、岩倉使節団に伴いフランスへ遊学。

帰国後、仕官しつつ私塾・仏学塾を開く。

『東洋自由新聞』『自由新聞』などで多くの論説を発表。

代表作に、『民約訳解』『理学鉤玄』『一年有半』など



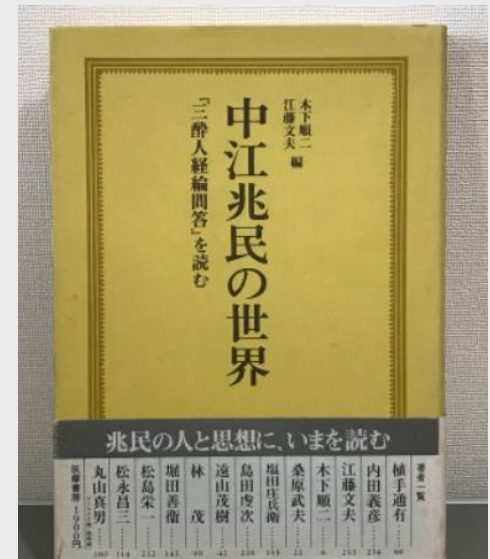
中江兆民 (1847 - 1901)

# 取り上げる書籍について

1977年、筑摩書房より刊行

「山本安英の会」が不定期に開催していた  
ゼミナールでの企画検討会に基づき、  
13人の錚々者による兆民論集。

桑原武夫、丸山眞男、松永昌三など



# 構成

はじめに	木下順二
総論	桑原武夫
Ⅰ 『三酔人経綸問答』 とは何か	遠山茂樹ほか3名
Ⅱ 兆民の思想と文体	松永昌三ほか3名
補論	丸山眞男
寄稿	松島栄一、島田虔次
総括	内田義彦
おわりに	江藤文夫

# 木下順二「はじめに」

実現できないことを実現しようとする精神構造の持ち主、兆民。

ロマンティストではない、むしろ徹底的なリアリスト（その初期の代表作品として「策論」が挙げられる）

とりわけ、煮詰められた思想作品としての『三酔人経綸問答』（明治20年）

憲法発布が目前に迫り、かつ自由民権運動の限界の極致という時代状況において、

兆民は今まで持っていた全ての力をこの一冊に注ぎ込む

# 「眉批（びひ）」の面白さ

兆民によって施された21個の眉批

ごまか

例えば「南海先生胡麻化せり」

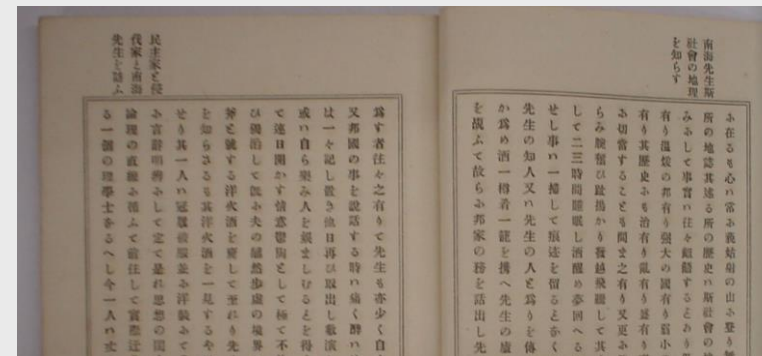
「一番兆民的な南海先生」に、

他の二人の酔人（紳士君と豪傑君と）が「あるべき正論」を求める。

しかし現実はそのようなことを言っていないほど急迫している。

本文と非常に緊張関係をもつ。それは同時に、後日、自身がその体現者として

現実の政治と関わる一つのコースでもあった。



# 総論 桑原武夫「兆民への接近」

矛盾の人—兆民

「残念な人」？ 「つまらない人」？

『三酔人』のような優れた作品を書く人に、なぜ「矛盾」があるのか。

それを解き明かすことが兆民を研究するうえでもやり甲斐がある。

「欠点」を探るよりも、「どうして彼は彼でありえたのか」という点に思いをひそめることの重要性を強調。

# 「リアル」への視座

「豪傑君」にも注目する意義

尊王攘夷的な反動思想の持主ではない「豪傑君」（丸山眞男）

→ パワーポリティクス（帝国主義的）な側面を有す

国際問題をパワーポリティクスの的に考えている兆民

現実主義的な観点を喪失せずに、きびしい現実のなかで次善策、

実現可能性のある目標をいかに作り出すか



# 現代にも生きる『三酔人』

- ・ 洋学紳士の平和論、デモクラシー論
- ・ 東洋豪傑のパワーポリティクス、リアルポリティクスの観点
- ・ 南海先生の政治における妥協の意義

→ 今もなお三酔人の議論の枠内にある

私たちの思考の座標軸になりうる作品、明治の代表的古典としての『三酔人』

Ⅰ 『三酔人経綸問答』 とは何か

# 遠山茂樹 「『三酔人経綸問答』の歴史的背景」

徳富蘇峰や陸羯南を手掛かりに、『三酔人』が出版された当時の時代背景を整理

- ・ 徳富蘇峰『将来之日本』（明治19年）の視点から

「旧日本は既に去れりと思ふ勿れ」

「今日の社会を支配するの重なる部分は凡て是れ旧日本の分子なり」

→ 「知識世界第二の革命」は、「天保の老人」ではなく「明治の青年」によって担われるべき。

# 自由民権運動の敗退という時代状況

蘇峰の書物（明治19年）も、『三酔人』（明治20年）も政治の転換期に書かれる

蘇峰：民権運動の漸進主義、現実主義への方向転換として平民主義を提唱

兆民：民権運動の原則をあくまで堅持

→ 「急進」よりも「漸進」（「ご都合主義」的）

自由民権の担い手として「下層民」に期待

⇔ 農工商の中産者に平民主義の担い手を求めた蘇峰

# 大同団結運動の結末

- ・ 陸羯南『近時政論考』（明治24年）の視点から藩閥反対の行動力を高く評価、一方で「大同論派」は「国権論派の一種」  
→ 大同団結運動は自由民権運動の理想を継承していない。  
ナショナリズム、国民的統一を強める国民的政治を主張  
しかし、羯南と兆民の思想は帝国主義の情勢に押され、結局後退する。  
ただし兆民と羯南の「統一戦線」の中から「兆民の思想の後継者」は育つ。  
「ナショナルにして民主的な思想」、すなわち洋学紳士と東洋豪傑と南海先生の討論を欠き、社会主義思想にのみ「後継者」を求めざるを得なかったという、近代日本民主主義思想における不幸。

# 植手通有 「兆民における民権と国権」

『三酔人』における三人の発言がどの点で共通し、どの点で対立するか

紳士君：原理家ないし理想家としての兆民

豪傑君：奇策家ないし権略家としての兆民

南海先生：自己の理想、自己の方針を現実に応用することに関心をもつ  
兆民

→ 三人の登場人物は「兆民の分身」（蘇峰）

# 『三酔人』の主題

独立の危機のさしかかった後進小国の日本をどうしたらよいのか？

軍事のみならず政治・経済さらには文化も含め西洋列強に従属させられるのでは？

「憂国する兆民」という観点から『三酔人』を捉え直す。

紳士君：日本の独立発展を図るには非武装・民主国家にしなければならない

「世界の大勢」に順応するのではなく、自らが「世界の大勢」を作り出す

豪傑君：中国侵略策の展開（小国日本が独立を図る手段という点で紳士君と共通）

現実がいかにあるかに則して、現実に対応する方策を立てる

# 兆民＝南海先生？

南海先生：現状においてなしうることを積み重ねつつ、歴史の進歩を推し進めていく

ほか二人の方針は現実には実行し難い。当面は恩賜的民権から恢復的民権へという

方針が無難であろう

→ 兆民に「陳腐」（当たり前）なことを自身が実現させる道へ向かわせる（南海先生たろうとする兆民の意思表示としての書）



# 林茂「洋学紳士・豪傑君・南海先生」

兆民の「国民」

特定の階級ではなく、国における全ての人民

政治の条件：「国民の意嚮に循由し」、あるいは「国民の智識に適當」すること

恩賜的民権に国民が如何に対処し、対応するのか。「民権」としての「点閲」

「時勢」（歴史的條件）を絶えず念頭に置きながらの現実への顧慮の重要性

# 「進化の理」 「進化神」

個人の主体性の放棄？

民主の実現を欲するなら、一般国民乃至民衆の共通の知識、共通の基盤を形成する意識的・思想的な共通項をもたらすよう努力をするべき。

「進化神の行く」ところは、「立憲の制」

華族制度や天皇が存する状態での「立憲の制」の実現（≠急進）

# 南海先生の「時」からの批判

## 南海先生の豪傑君批判

「天子宰相が独断黙決する」という「立憲の制」以前の時代遅れ

→ 「過去」のものとして豪傑君の所説を批判

## 南海先生の紳士君批判

「現在に益す可ら」ず。

南海先生本人は・・・

当時の段階において、実現し得る（時勢に適う）課題を実現すべき。

## II 兆民の思想と文体

# 松永昌三「五つの問答体-兆民の方法-」

『三酔人』以外の問答形式の著作

国会問答 . . . . . 「進取子」 vs 「持重子」

論外交 . . . . . 「平和外交論」 vs 「大国主義」

国会論 . . . . . 「急進旨義」 vs 「漸進旨義」

選挙人目ざまし . . . . . 「有限委任論」 vs 「無限委任論」

# なぜ問答形式なのか？

1. いくつかの視点から問題とする対象に照明を当てて、その特質を鮮明にする
2. 真理は、複数の意見・思想が自由に討議することを通じて獲得できる
3. 「理」と「利」とをどう絡み合わせて問題を解決するか
4. 弾圧を避けるため？

# 『三酔人』の論点から兆民の思想をみる

「外交論」 「軍事論」

- ・ 生活の根本（生きる権利）という観点から戦争を否定（『論外交』）
- ・ 徴兵常備軍の反対。土著兵であっても「護国」は可能（『土著兵論』）

→ 国家権力から軍事を分離する。軍事とはあくまでも人民サイドの問題

「国家は亡滅するも人民は屈せず」

洋学紳士に相通じる命題

# 堀田善衛 「知識人と大衆-兆民の文体-」

なぜ漢文なのか？

近世・明治初年の漢文学習は、西洋語習得に役に立った

基本的に西洋語の文法と一致する漢文は翻訳に際しても都合がよかった。

（堀田のこうした見解に、拙稿「中江兆民はなぜ『民約訳解』を漢文で書いたのか？」は批判）



# 民主化の徹底がなぜ軍備撤廃に結びつくのか

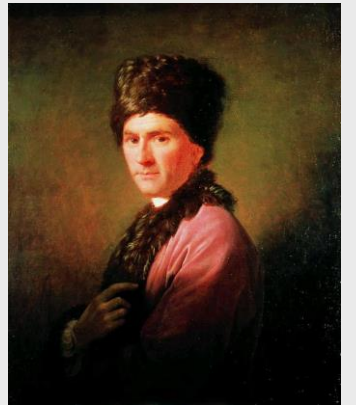
ルソーやサン=ピエールの平和論に由来する洋学紳士の平和論

自由→平等→博愛、そしてそれが軍備撤廃に結びつく

「軍楽隊」に、ついていくな（アラン『マルスー裁かれた戦争』）

→ 独裁者の出現、あるいはそれについていくことへの戒め

そうした観点は洋学紳士においてもみられる



# 南海先生に象徴される日本の「民衆」

明治以来、黙って「台所の隅」にいた人たちに眼差しを向ける意義

「台所の隅」にいた人たちのアナロジーとしての南海先生的「傍観」

→ 民衆は洋学紳士と東洋豪傑の意見に「傍観」せざるを得ない

どちらも「架空の言たるを免れず」という南海先生からの批判

# 塩田庄兵衛「十九世紀から二十世紀へ —兆民と秋水—」

幸徳秋水における兆民の影響如何

明治21年（『三酔人』の翌年）、追放処分を受けて大阪にいた兆民のもとに秋水（伝次郎）が学僕として居候

『莊子』に由来する「秋水」は、かつて兆民が使用していた号

兆民：日本資本主義の生成期に、自由民権運動の理論家

秋水：日本資本主義が確立すると同時に帝国主義に転化していく日本を批判

→ 19世紀から20世紀への転換期に兆民から秋水へ「バトン・タッチ」

# 秋水の活動

- ・ 「十九世紀と二十世紀」

これからの歴史は自由主義から帝国主義の社会に発展し、その後、社会主義に向かっていくであろう（「歴史は人類進歩の記録也」）。

→ 最終的には社会主義は帝国主義に勝利するであろう。

- ・ 「自由党を祭る文」

旧自由党を吸収し成立した立憲政友会に激怒した兆民が、秋水にけしかける。

自由党に奉げる「弔辞」。自由平等正義博愛のためには社会主義に進むほかない。



# 秋水の活動

- ・ 「廿世紀之怪物帝国主義」

『三酔人』の如く、秋水の蓄積が集約されたもの

帝国主義の土台となる「愛国心」を否定

力を尽くして帝国主義と闘わなければならない（さもなくば、日本と世界の前途は闇）

- ・ 『社会主義神髓』

「革命」を主張しつつも、一方で社会進化論に則り平和的に社会主義を実現すべき

- ・ 「余が思想の変化」（クロポトキン流の無政府主義への転化）

普通選挙や議会主義の運動のやり方ではなく、いまは「直接行動論」の時代

# 大衆的基盤抜きのエリート主義

社会主義政党の立て続けの弾圧により、戦う人民組織部隊をもたず、  
大衆的基盤のない政治活動の無力さが鮮明に。

→ 秋水は、それを育てるよりも「非政治主義」「非政党主義」に転化

「政治」を議会内闘争という狭いワケで捉えている点で、秋水の思想は「大衆的  
基盤抜きのエリート主義」

兆民と秋水はその点で近い間柄だったといえる（？）

# 補論

# 丸山眞男 「日本思想史における問答体の系譜」

問答体という形式・・・仏教の「法論」（議論よりも論争）がモデル？

あるいは、ドラマチックに描かれる空海『三教指帰』

架空の名前、一つの舞台が設定、、、

そこで各々が儒・仏・道のイデオログが自身の立場を開陳

→ 「教えを請う」問答体（栄西や日蓮の著作にあり）とは異なる、対等な問答。

（儒と道とをアウフヘーベンする仏が優位するとの結論が前提にされるとはいえ）



# 異なった世界観との「対決」

「法論」ではないカテキズム（教理問答）に由来する問答体ができる。

例) 『どちらな・きりしたん』（基本構造は、弟子の教師への質問。ただし、時に討論する場面も）

近世には大量の問答体が登場。しかし、問答体をとったこと自体の斬新な思想的意味はそれほどない（中江藤樹『翁問答』、熊沢蕃山『集義和書』、安藤昌益『法世物語』など）

# 明治の問答体

「開化物」の「話者」の一方の名前が「旧さ」（「旧平」「頑蔵」）を、  
他方が「新しさ」（「開次郎」など）を表す。

「新」「旧」同士の問答

# 『三酔人』の位置づけ

前提としての絶対的真理（ドグマも含め）に導く手段・方便としての「対話」ではないという点は重要。

あるいは、ソクラテス・プラントンのような「無知の知」を自覚させ、臆見と真理を区別し、未知の真理に到達するためでもなさそう。

しかも、三人の酔人は、何か特定のイデオロギー的立場を代表しているのではなく、複数の観点、色々な角度からのスポットライトが投入されている。

→ 現実における問題の所在を明らかにするための装置

# スポットライト

複数のライトをあてることによって、理とか情とか、違ったレベルで物事を観察する態度が大事。

→ 問題の多面性を把握することによって、政治決定において何が優先されるべきか、すなわち政治政策の決定につながる。

**寄稿**

# 松島栄一 「『三酔人経綸問答』の史論的考察」

『三酔人』を一個の政論の書とみるだけでなく、政論の中でも、さらにその歴史的来由・経過を考察する一個の史論と捉えてみる。

洋学紳士による「立憲国」・「民主国」、あるいは「永久平和」論の主張、

さらには「偉業」としてのフランス革命観

→ 一個の歴史観に基づく、民主制政治を強調しようとする『三酔人』。

史論的著作として、歴史的事件・人物、または土地・国に対する自由な論評

## 注目される国や人物 216-224頁の図も参照

イギリス・フランスへの言及が多い、それに次いでドイツ（プロイセン）やロシアも多い。

人物でいえばナポレオンが圧倒的に多い（日本では豊臣秀吉のみ、孟子も一度限り）

そうした意義は、今後、もっと重視されるべきであろう。

# 島田虔次「兆民の愛用語について」

- ・「磊落<sup>らいらく</sup>」（気が大きく朗らかで、小さいことにこだわらないこと）

大石正巳や西園寺公望に対する評価。『三酔人』にも「民主の制は、磊磊落落として、其胸中、半点の塵汚無き者なり」（『十八史略』が出典か）

- ・「高亮<sup>こうりょう</sup>」（理想主義者の気象としての調子の高い快活さを形容することば）

「南海先生」、ルソーや西園寺に対する評として登場。

二つの愛用語は兆民のパーソナリティを考えるうえで重要



# 理義

理義は兆民の思想の根本にかかわるキーワード。理義に生きる者であるがゆえに、人格も「磊落」「高亮」であらねばならない。

もとは『孟子』に由来する

牛肉や豚肉は味覚を悦ばす、理義は心を悦ばす

「兆民の愛用語」の観点から兆民の思想を考察できるのでは？

# 総括

# 内田義彦「ユートピア物語としての『三酔人 経綸問答』」

・再び「眉批（びひ）」と問答体について

本文が真面目であればあるほど、茶化した眉批によって臨場感をもたせる効果

眉批もまた「一箇の登場人物」ゆえに、『三酔人』の登場人物は4人。

紳士（697行）→豪傑（413行）→南海先生（257行）の順番で自説を開陳

後ろの方にこそ、話の重点が置かれる（紳士の議論を、豪傑が覆す）

とはいえ、やはり『三酔人』は対話というより演説集

# 「ユートピア物語」としての『三酔人』

ユートピアの効果：現実だと思っていることは、果たして「現実」なのか？

『三酔人』にそういう要素がみられる。

南海先生の「心」は現実の中にはない。

→ 地理を論じるけれども、具体的な国名を出さない（某国）

現実とは「現実」ではないところから見いだされる？

# 天賦人權は学問的に論証できない？

ユートピアにおける「学問」とは？

加藤弘之による優勝劣敗の観点からの天賦人權説批判。

→ 優勝劣敗は科学的に論証できるが、天賦人權はそうではない

加藤弘之的視座が豪傑君に受け継がれ、紳士君への批判に援用される。

しかし、南海先生からみると、そういう学問（優勝劣敗）は「学問」といえるのか？

一度敗れ去った天賦人權説をユートピア的な地盤に引き戻しながら、

再度構築しようとする気概。

おわりに

# 江藤文夫 「『三酔人経綸問答』への視点」

「予言の書」としての『三酔人』

現実に対する切実な願いを込めて、実現の過程を未来への展望のなかにあわせみる姿勢。

現実のなかにいつつも、その現実を超える目を働かせている。

# 「知的共同体」の創出

仕官してるか否かに関係なく、同じ「道」を講究する儒者の紐帯

→ 激しい論争は可能。

明治20年代までは、豪傑君と紳士君のような対蹠的な人物が出会っても討論することができる共通の知的基盤があった。学歴とは関係のないintellectual

(豪傑君も紛れもなくintellectual)



# 「進化神」をめぐって

紳士君：直線的で勇ましい。「進化の理」は世の中のあるべき相を示す

南海先生：「（紳士君的）進化の理」を前提としつつ、その実現の過程における現実認識を伴って、「意」と「理」との間の飛躍を埋める。そこに改めて「進化の理」をみていく。

→ 単に理想主義と現実主義との相克とか対決を意味しない。

南海先生の考察や認識を軸に、『三酔人』は「予言の書」として機能する？

蛇足

# 報告者が思う『三酔人』の意義

凡その論者に共通していた視点

- ・ 兆民がこの時点で持ちえた全てをそそぎ、成った作品
  - ・ 必ずしも対話や討論ではない「問答」
  - ・ 三人の酔人が後の兆民の思想に、あるいは兆民の継承者に繋がる
- 『三酔人』以前の兆民の思想から『三酔人』を位置づけることはできないか？

# 『民約訳解』の系譜としての『三酔人』

衆あい会して事条を**討議**するに、皆な予め時務の需むるところを知り、而して初めより私に相い約するところなければ、則ち其の議を発する、必ず各おの己が志を尽す。各おの己が志を尽せば、則ち其の見るところ、必ず小異同なきこと能わず。而して此の小異同中、必ず協賛を得ること最も多きもの有りて、以て公志の存するところを知るに足る。此の如くなれば、**議は常に中正を得て、失錯或ること無し、是を之れ議事の正法と謂うなり。**

→「討議」の意義。「失錯」に陥らない「中正」を得ることを目指す。

# 『民約訳解』の系譜としての『三酔人』

〔volonté de tousには〕 **必ず両端在る有り**。最も急なるものと最も緩なるもの、最も激なるものと最も和なるもの謂なり。此の二者は、**勢かならず相い容れず**。二者あい容れざれば、**則ち中なるものの必ず將にその間に出でんとす**。是れ乃ち衆志〔volonté générale〕の存するところなり。吾れ故に曰く「衆志なるものは、必ず衆人の志の中に於いて之を得」

→ 異なる見解の存在によって「中」が得られる。ルソーとは異なる訳出。

# 「中」とは？

「その間をとって・・・」というような妥協の産物ではない。

『中庸』に由来する「中」

「舜は其れ大知なるかな。舜は問うところを好み、邇言を察することを好み、

悪を隠して善を揚げ、其の両端を執りて其の中を民に用う、其れ斯れ以て舜と為すか」

→ 「中」とは「一箇の恰好の処」（島田虔次）

異なる意見があっても「討議」を通じて**人民自身**が「中」を得る（『民約訳解』）

# 討論の意義

・ 真理ハ衆説相抵激スルノ間ヨリ発ス【中略】諸説大抵皆一片ノ真理ヲ包含ス故ニ**必ず**相討論琢磨スルニ非ザレバ以テ完全ノ真理ヲ求ム可ラズ（「政党ノ論」明治15年）

何事に就ても道理は唯一箇なれども夫れが中々急に見出し難きが故に、甲乙丙丁と種々の党派が競ふて張り合ひ言ひ合ふて互に穿鑿するときは、其中央なかから彼の道理が追々と頭を昂げて人々の目に留まる様に成る事も有る可し、左は無くして、一人の智慧者が何か一言を吐く度毎に大勢の人が皆同意して少も言ひ合ふ事が無きに於ては、真個の道理は出て来る手掛が無きなり、此等の筋合は英の大学者ミール〔J・S・ミル〕と云ふ人が委しく説明し有事にて他日追々嘯し申べし（『平民の目ざまし』明治20年）

# 「中」の思想家？

確かに、『三酔人』の「問答」は形式的には討論ではないかもしれない。

しかし異なる見解が存在することに拘り、「矛盾」（桑原武夫）をあえて設定することに意義を見出していたのでは？それが、「中」「真理」を獲得する欠くことのできない条件。

『社会契約論』で消極的であった意見の多様性を『民約訳解』で積極的に定置し、相異なる意見から如何にして「中」を得ることができるかを模索。その努力成果が『三酔人』に結実？

→ 『民約訳解』の系譜に『三酔人』を位置づけることはできないか。



**ご清聴ありがとうございました**